

国語科

1 単元前の子どもの姿

今日は、なかよし会のじっこういいんをきめました。すごくやりたかったけれど、じゃんけんでまけてしまいました。すごくくやしかったけれど、明日のがっきゅうだいひょうのオーディションではがんばりたいです。早く明日になってほしいです。(4月10日 日菜の生活日記)
※じっこういいんにりっこうほしたその気持ちがすてきなあとと思います。明日のオーディションでは、どんなクラスにしたいか思いをつたえられるといいね。

3年生になり、何事にも積極的にチャレンジしようという気持ちに溢れている日菜。1年生を歓迎するための「なかよし会」の実行委員に立候補したが、他にも多数の希望者がいて、じゃんけんで負けてしまい実行委員になることはできなかった。「早く」からは、悔しい気持ちは残るものの、チャレンジしていく気持ちは次の学級代表へと向いていることがわかる。次の学級代表オーディションはじゃんけんでなく、自分が学級代表になったら、どんなクラスにしていきたいかを伝え、それを聴いたクラスの仲間の投票によって選出されるため、思いが伝わるために「がんばりたい」と意気込んでいる様子うかがえる。

今日は、がっきゅうだいひょうをきめました。わたしはりっこうほしたけれど、がっきゅうだいひょうにはなれませんでした。でも、道子ちゃんのどんなクラスにしたいかという思いは、とてもよかったので、びっくりしました。でも、こうきは、だれにもゆずりません。(4月12日 日菜の生活日記)
※がっきゅうだいひょうになれなくてくやしかったと思うけれど、道子さんをすなおにみとめる気持ちがとてもすてきなあとと思います。がっきゅうだいひょうをサポートしてくださいね。そして、こうきにはぜひ!

日菜は、低学年の頃、常にクラスの先頭に立って、何事も引っ張ってきた。2年生の頃には、学校の一大行事である6年生との「お別れ音楽会」において、学年の代表として指揮者にも選ばれた。そんな日菜が4月から2度にわたり、悔しい思いを味わった。自分に自信をもっている日菜が、「びっくり」したと、学級代表に選ばれた道子の思いを素直に認め、称賛している気持ちが伝わってくる。これまで、様々な場面で先頭に立って引っ張ってきた日菜が、味わった悔しい思いを、仲間を認めることで、プラスに変えていこうとしていく気持ちがうかがえる。それと同時に、「こうきは」と、すでに後期の学級代表へと目標を定めており、日菜の意欲的な姿勢は今回の出来事により、さらに加速させていることがうかがえた。

高めたい日菜の非認知的能力

- ・仲間の考えを聴き、受容することで、自分の考えとのずれや違いに気づき、改めて考えを見直したり、新たな視点をもってことばを見ようとしたりして、追究意欲を高め取り組んでいくことができる。

2 1 学期実践

3 年国語科単元

「かたきをとっても はれない気持ち なみだが語る チリンのかなしみ」

(1) 教科の学び

- ・チリンの思いを追究していくなかで、自分と仲間の読みのずれや違いから、教材文のことばを根拠にして、チリンの悲しみに迫ることができる。

(2) 実践の実際

3年生国語科単元「かたきをとっても はれない気持ち なみだが語る チリンのかなしみ - 『チリンのすず』やなせたかし・作」において、『チリンのすず』の読み聞かせを聴いた日菜は、これまで出会ってきた物語と違い、最後まで悲しみが続いていることに気づき、「ハッピーエンドで終わらない」と、うかない表情でつぶやいた。

一通り読み終えたところで感想を書いた。日菜は、最後の場面で、母親の仇を取ってウォーを殺したチリンが後悔しているのは、ウォーのことが大好きになっていたからだと考えた。学級全体でも、最後の場面でのチリンの気持ちを考えている姿が見られた。これまで読んできた感想を仲間と伝え合うなかで、最後の場面に話題を焦点化し、チリンの悲しみの理由に対する、互いの考えのずれや違いを明確にしていけば、疑問を問題意識にまで高めていくことができると考え、問いを生むかかわり合いを設定した。

最後の場面でのチリンの気持ちについて、お父さんのようなウォーを殺してしまった悲しみや、一人ぼっちになってしまった悲しみなど、悲しみの理由はいくつかあるという考えが出された。それに対して日菜は、チリンの悲しみとは、取り返しのつかない悲しみであると発言した。悲しみの種類ではなく、悲しみの深さへと目を向け、簡単には考えることができないチリンの悲しみがあることに気づいていた姿である。また、チリンに殺されたことを喜んでいるウォーのことばを根拠に、ウォーの気持ちにも目を向けて考えていた。これまでチリンの姿から気持ちに迫っていた日菜が、ウォーのことばを根拠にして考えていこうと、さらに追究の方向性を明確にし、勢いよくひとり調べへと向かっていった。

おかあさんのかたきはとったけれど、チリンのおねはちっともはれなかった。なぜなら、おとうさんのようなそんざいのウォーをころしてしまったから。でも、かたきをとったことはよかったと思っている。ウォーは28, 29ページのところで「おまえにやられてよかった。おれはよろこんでいる」とかくごしているけれど、チリンはウォーの大切さに気づかないままころしちゃったから、こうかいしている。
(5月17日 日菜の学習記録)

※なるほど。ちっともはれないのは、大切なそんざいであるウォーをころしてしまったからだと考えたのですね。おかあさんのかたきをとってうれしいっていうのは、どこの文から思ったかな。

「おれはよろこんでいる」ということばから、問いを生むかかわり合いの際に抱いていた殺さなければよかったという自らの考えとは反対に、「かたきをとったことはよかった」と、考えの変容が見られた。そして取り返しのつかない悲しみの正体は、そんなウォー

のことを「気づかないまま」殺してしまったことなのではないかと考えた。これは、ひとり調べにおいて、最後の場面を繰り返し読むことで、チリンがウォーを殺した場面にも目を向けて、ウォーの気持ちを読み取ろうとしたからであると言える。一方で、チリン



ンにとって父親代わりでもある大きな存在のウォーのことを殺してしまったことに対する、後悔の悲しみと考えている和也や敏彦の姿があった。これは、日菜のように、仇を討ったことはよかったけれど、ウォーの大切さに気づかないまま殺してしまった悲しみという考えとは違う悲しみに対する姿が見られたため、追究を見直すかかわり合いを設定した。

チリンの悲しみってなんだろう

和也 32 お母さんの仇を取って殺したんだけど、なんか嬉しくないっていうか、お母さんのためになったかわかんない。お母さんのためになったかわかんなくて悲しいんだと思う。

日菜 33 それお母さんのためになってるよ。

和也 34 仇を取ったのは、お母さんのためにやったことなのに、そんなによくなかった。

日菜 35 それ、でもちょっと違う。

－ 〈略〉 －

日菜 45 30, 31ページに「ぼくはおかあさんのかたきをとった。しかし、ぼくのおねはちっともはれない」ってあって、「はれない」って意味は、嬉しくならない、楽しくならないって感じで、それで、「ぼくはおかあさんのかたきをとった」ってときに、もし、チリンがお母さんの仇を取らなければよかったと思ってたら、「ぼくのおねはちっともはれない」と書いてあると変になっちゃうから、ぼくはお母さんの仇を取ったことに関しては嬉しいんだけど、しかしぼくのおねはちっともはれないってことは、ウォーを殺したから。お母さんの仇を取ったのは嬉しいんだけどって意味。お母さんの仇を取ったのに、「しかし」ってあるから、目標を果たしたのに心が晴れない。それはウォーを殺したから。「しかし」が大切。

雄二 46 なんか、健太君のと逆なのかかかかわっているのかわかんないんだけど、なんか「はじめてわかった」ってのは、健太君の仲間とは思っていたけど好きではないってのもありそうなんだけど、ちょっと違って、ぼくは、好きではないってのはちょっと違うような気がする。

健太 47 あっ、それっ、好きではないと好きの間で、仲間で、好きってのは感情に出してなくて、わかんなくて、でも、ウォーが死んで好きってわかったから。好きではないとは違う。
(5月28日 追究を見直すかかわり合い 授業記録)

追究を見直すかかわり合いでは、最後の場面でのチリンの気持ちについて伝え合った。和也32「お母さんのためになったかわかんなくて」と、自らの行動に対して悲しみを抱いていると考える発言に対し、日菜33「お母さんのため」や日菜35「ちょっと違う」と、和也の発言と自分の考えとを比較している姿がうかがえた。そして、「『はれない』って意味は」と本文のことばの意味から読み取り、お母さんの仇さえ討つことができれば晴れるはずだと考えていたチリンの気持ちを考えていることがわかる。この日菜の考えは、そうするしか他に方法がなかったが、そのことが深い悲しみを生み出すことにつながっているという、この物語の抱える悲しみの本質に迫る部分であった。さらに、

「はれない」気持ちの理由にかかわってくる雄二 4 6

『はじめてわかった』ってのは」健太 4 7 「ウォーが死んで好きってわかったから」という発言は日菜の考えを大きく揺さぶった。これは、日菜の授業後の学習記録に「はじめて」や「いつのまにか」といった本文中のことばが初めて登場していることからわかる。かかわり合いでの日菜は、仲間の考えを受け入れるという意識よりも、自分の考えを納得してもらおう



仲間の考えを聴いて思ったよ

とする意識が高い姿が見られた。これまで自らの生活経験や感情から考える姿が見られた日菜であったが、仲間とのかかわりを通して、本文のことばを根拠にすることが大切であると感じ始めた。これは、仲間の考えにも耳を傾け、受け入れ始めた姿であると考ええる。

日菜は、ウォーを殺してしまった悲しみのなかに、「いつのまにか」好きになっていたにもかかわらず、殺してしまった悲しみがあることにも目を向け始めた。そして、「いつのまにか」ということばから、死んで急に好きになったわけではないと読み取っていた。そんな日菜に対して、教師は朱記で、仇を討つときにも「好き」という気持ちがあったのではないかと、考えを揺さぶった。すると、チリンの悲しみについて、お母さんの仇を討ってウォーを殺してしまったことではなく、どうしてウォーを殺さなくてはいけなかったのかと、さらにこだわりをもって追究を進めていった。本文を根拠にしていた読み取りを超え、チリンの気持ちに迫っていた日菜だからこそ、ウォーを殺したその先にある悲しみにまで考えを巡らせていた。学級全体でも、ウォーを殺してしまったチリンの悲しみに迫る姿が見られたため、この物語に込められた思いに迫っていくことができると考え、核心に迫るかかわり合いを設定した。

核心に迫るかかわり合いでは、ウォーのことが好きなのに、なぜ殺してしまったのかについて伝え合った。これまでのかかわり合いのなかでは、本文のことばを根拠として自分の考えを述べるが多かった日菜が、本文のことばに加えて、仲間の考えを取り入れて考えることができるようになった。これは、追究を見直すかかわり合いにおいて、自らの考えに影響を与えた雄二や健太の考えに共感したからだと考ええる。

最後の場面でのチリンの気持ちについて、後悔して悲しんでいることは共通していることがわかったところで、教師は「チリンの悲しさ、この物語の悲しさって何だろう」と問いかけた。すると、日菜は「お母さんの悲しみもあるんだけど」と、チリンにとってお母さんを失った悲しみの大きさというものを理解しつつも、この物語の本当の悲しさは別のところにあると考えた。「ちっともはれない」という本文のことばを根拠にしつつも、「やっぱり」ウォーを殺してしまったことであると、客観的にとらえたことをもとに、主観的な考えを加えている日菜の姿があった。好きという気持ちに気づかず、気づいたときにはもう遅く、後悔しか残らない悲しさこそが本当の悲しさであると、まさに、

この物語に込められた思いに迫る姿がそこにはあった。

わたしは、チリンがおさないときと大人になったチリンのきもちはにていると思います。なぜなら、チリンはウォーのことがきらいなときはほとんどなかったんじゃないかなと思ったからです。31ページで「いつのまにか」と書いてあるので、チリンはウォーのことが好きという気もちをもっていたんだと思います。

わたしは、このものがたりのなかで、どんなきもんにたいするこたえも、ものがたりをぜんぶ読まないとなにもわからないと思いました。これまで、その人物の気もちをしっかりと考えたことがなかったけれど、人物の気もちをしっかりとかんがえると、気づいたときには遅いってその本の言いたいことがよくわかることもありました。そして、どんな本を読んでもそういうことがわかるようになりました。

(7月1日 日菜の振り返り作文)

※ひなさんは、「いつのまにか」ということばにこだわって読んできましたね。そんなひなさんだからこそ、「いつのまにか」好きになっていたチリンの気もちを考え、この本の言いたいことまで考えられるようになったんですね。

核心に迫るかかわり合い後、これまでの追究のよさを確認できるように振り返り作文を書く時間を設けた。日菜は、「その本の言いたいこと」として、「気づいたときには遅い」という物語に込められた思いに迫ることができていた。さらに、それはどこにも書いていないし、見て（読めば）わかるような簡単なものではないとも考えた。物語を何度も読むことでチリンの気持ちに迫ってきたからこそ感じられたのである。これまでの学習を通して、登場人物の気持ちを「しっかりと考えたことがなかった」日菜が、「しっかりとかんがえ」てきたことで、ことばを根拠に、そのさらに一歩先にある気持ちにまで迫ることができたと自己の成長を感じている姿が見られた。さらに、他の「どんな本」に出会っても、何度も読めばわかることがあると学びを拓げている姿までも見られた。子どもたちが自らの成長に気づいたところで、仲間の成長を聴くことで、自分の気づかなかったことに共感したり、自分の成長とのつながりを自覚したりできると考え、学びを振り返るかかわり合いを設定した。

日菜 6 私は桜子さんに少しだけかかわって、例えば文章を読んで31ページにウォーを殺さなければよかったとは書いてなくて、「ぼくはおかあさんのかたきをとった。しかし、ぼくのおねはちっともはれない」とか、「おまえをすきになっていたのだ」としか書いてなくて、みんなが言ってた「はじめて」とか「いつのまにか」を組み合わせると、「いつの間にか好きになってたことを初めて知った」っていうことになって、それはチリンの気持ちを考えないとわかんないし、それが「いつのまにか」ってことがわかったら、弟子になってた頃はウォーのことが嫌いだったけど、いつの間にか好きになってたってことだから、だんだん好きになってたということがわかって、それが学んだこと。

－〈略〉－

亜美 90 みんな少しずつ意見が違っているから、自分も一つの意見だけじゃなくて、自分が思っていなかった意見とかも出てくるから、新しい意見が思いついてきた。

日菜 91 たしかに。 (7月9日 学びを振り返るかかわり合い 授業記録)

学びを振り返るかかわり合いでは、『チリンのすず』を通して学んだことやわかったことを伝え合った。日菜はこれまでチリンの気持ちを追究してきたなかで、本文のことばを根拠にしてチリンの気持ちを読み取ってきた。一つのことばにこだわり、本文のなか

で使われていることばの意味を理解したからこそ、チリンの気持ちに迫ることができたと、教科の学びに対する自分の成長の理由にまで目を向けて自覚することができた。また、亜美90「みんな少しずつ意見が違っている」からこそ、自分の考えと比べるなかで、新しい意見が「思いついてきた」という考えを聴いて、日菜91「たしかに」とつぶやいた。これは、亜美の意見を聴いたことで、日菜が自分では気づかなかった成長に気づき、共感した姿である。

日菜は、学習のなかで、仲間に納得してもらおうとすることで、本文のことばを根拠にする大切さを学んだ。そして、仲間の考えに耳を傾け、自分の考えと比較することで、追究意欲が刺激され、方向性が明確になることがわかった。